

江戸袋物の粹

- その金工金具について -



江戸風俗研究家 平野 英夫

もう16年程前の事である。東宝劇場のプロデューサーから突然電話があり、帝国劇場の舞台で、江戸時代の簪職人が仕事をするシーンや、その仕事場の様子を再現したいとの事。また役者にも演技指導をしてほしいとの依頼があった。私が銚屋の仕事をしている事、また浮世絵を基に江戸の市井風俗を研究している事等を婦人雑誌で読み、電話をしてきたのだ。自宅に招き詳しく伺ってみると、原作は山本周五郎の「おたふく」という時代小説で、大店のお嬢さんと簪職人との恋物語だという。その台本には、簪職人を彫金家の様に描いており、銚屋と彫金家とを混同していたのには些か驚いてしまった。

当時、文化・文政頃の彫金家は、武家の刀装具が中心の仕事であり、簪や紙入れ、鏡入れなどに使用する板鎖や前金具の裏座などの金具類は、銚屋の仕事であった。高度な鑿を使う仕事は彫金家に依頼し、他の工芸分野の仕事の様に分業であった。

これから紹介する袋物の金工金具類は、今では殆んど見懸けることが無い物が多く、江戸の文化や美術に興味の有る方々には、とても参考になると思う。又これを踏まえて、時代劇や時代小説を読んだり、美術館の浮世絵を鑑賞したりする時など、思い出して載けると幸である。

江戸袋物を大別すると、懐に入れる懐中袋物と、煙草入れに代表される、腰間を飾る袋物の二つに別けられる。今回は、女性の懐中袋物からみてみたいと思う。

〔懐中袋物〕

その1 女性用懐中袋物

「懐中鏡入れ」

女性用懐中袋物（俗に女持・めもちと呼ぶ）の代表的な物は、懐中鏡入れである。江戸後期の女性達は、外出の折などは、必ずといってよい程、帯と着物の間に差し入れて用いた。この袋物の中には、銅製の鏡と、櫛や揚子、コンパクトに纏められた化粧道具などが入っていた。

写真の鏡入れは、懐紙を巻いた状態と、それを取り外し、表面の裂を見せたところ。懐紙は、高価な裂や、皮革などを保護する役目をしている。鏡入れ本体を、鎖状の物で巻いてあるが、これを胴締華鎖と呼び、鏡入れを止めるストッパーの役割と、写真の浮世絵で描かれているように、外出する時には、これを取り外して、一方を鏡の裏側に差し入れ、又その一方を長く垂れ提げる様に出して使用する。この華鎖が、外出した時や、花街の宴席の場で揺れる様は、まさに江戸の粹と、情緒を感じさせるものである。

写真はこの銀製胴締め華鎖のバリエーションである。写真-1、-2、-3はその拡大写真で、



写真



写真

胴締めの止め金具の唐獅子や、牡丹の打出し彫り、多様な鎖部分の仕事など、素晴らしい出来となっている。これらの技術は、ほとんどが銚屋の仕事であった。

写真は相良縫の鏡入れで、この作品の特徴は、取りはずさないで固定された、胴締め状の鎖である（写真-1）。袋の中に入れる品物の嵩に応じて、どの箇所でも止められる様に工夫されたものである。

「簪迫」

もう一つ、女性袋物の華は、簪迫であろう。現在では、七・五・三の時、幼女の胸元を飾るくらいでしか、普段目にすることが出来なくなっているが、江戸時代は、非常に高価であったことから、大名・旗本の婦女子や、大店の婦人等の間で用いられた。

写真の簪迫は、金糸織地に、大きく牡丹を刺繍で描いたもので、非常に豪華に造り上げられている。付属に付けられているのが、銀製平打形の簪迫専用の簪で、平打と、ピラピラ部分の鎖は、髪に挿す簪と同じであるが、耳搔きが付かない形態となっている。



写真



写真 -1

写真 -2

写真 -3

この銀製の簪迫は、普通のものより長めに仕立てられ、極小の小豆鎖と綾鎖とを交互に配置し、その鎖の先端には、牡丹を切り抜き、毛彫りで加飾している。この簪迫を胸元に入れ、外出をすれば、簪がユラユラ揺れ、かすかに奏でる銀鎖の音色が、耳目を集めたことであろう。写真-1は簪迫のバリエーション。向って右側の簪は、自家紋（沢瀉紋）を彫り込んだ美事なもので、銀の地金取りも厚く、大変重量もあり、大名家のものであろうか。

その2 男性用懐中袋物

男性が、懐中に入れて使用する袋物には、紙入れと、懐中煙草入れなどがある。煙草入れ関係の金具類は次回に譲ることとして、紙入れから見てみたいと思う。

「紙入れ」

紙入れに使用される金工金具類で、最も多く使われているのが、俗に板鎖と呼ばれている金具である。これは、板状にした金属と金属を、いくつか割ったパイプを蝋付して蝶番状にしたもので、この形状は千差万別あり、また太刀の拵に付



写真



写真 -1



写真



写真 -1

けられている兵庫鎖を、さらに複雑化して編み込んだ鎖金具も使用されている。

写真 は大形の紙入れで、相良縫の技法のうちでも、縫漬しという高度な技術で仕上げられている。図柄は「田原儀太の百足退治」で、顔や手には、象牙が嵌め込まれ、大変豪華に仕上げられている。豪商や札差などが造らせたものであろうか。この紙入れに取り付けられている板鎖(写真 -1)は、赤銅地に、布目象嵌で幾何文を金で施し、本体の紙入れと相俟って見事に調和している。

写真はオランダ金唐革の紙入れで、極印手と呼ばれる技法で造られた金唐革で仕立てられたもの。この金唐革は、天明元年(1781)装剣商、稲葉新右衛門が上梓した『装剣奇賞』所載、淀屋革と同種の物で、当時、非常に貴重で高価であったことが記されている。使用されている板鎖(写真 -1、-2)は、金・赤銅・銀・素銅・四分一の五種類の金属で構成され、図柄も表・裏一対となる様に、唐の賢人を色絵の平象嵌と片切彫りなどで美事に表出している。作者は江戸金工の名人、小澤秀楽。

写真は、大胆に浪に鯉を大きく型押しした姫路の文庫革で仕立てられた紙入れ。板鎖(写真 -1)は銀製で、先端の止め金具は、紙入れに合わ

せ、浪に鯉を打出し彫りとし、使い手の好みを表わす。このような鯉の図柄などは、後年のヨーロッパのジャポニズムの工芸品にも見受けられる。

写真は渡り物の茶シボ革で、水牛の腹の皮を使用したもの。板鎖(写真 -1)は銀製で、一片を八角の枠状にし、その中に打出し彫りにした十二支の内、六支(子から巳)を嵌め込む。裏側は毛彫で残りの六支(馬から亥)を彫り込んでいる。止め金具の部分は「寿」を角字に彫り上げ、これも持ち手の好みが表出されている紙入れの一つといえよう。

はオランダ更紗の横長形紙入れ。染め上げたオランダ船を、手刺しの糸で輪郭線を強調。板鎖は銀製で、止め金具(写真 -1)は当時非常に珍しい“VOCコイン”を覆輪止めにして利用。江戸後期に大変流行した、オランダ趣味の一つといえよう。

それから、意外に少なく、技術的にも手の込んでいる板鎖二点を紹介する。

写真は銀製で、板の表面に大・中・小の幾何文様がエンボスされている。この技法は、地金を圧延するローラーを利用したもので、上下のロールの内、一つにこの様な浮出し文様を鑿で彫り込んでおり、地金を挟んで圧延するだけで同じ文様

が出来上がってくる。量産を目的に作られた物であるが、金型の出来が素晴らしく、今でも十分通用するデザインである。

写真は、白銅地の細い針金を編み込んだ幅広の鎖。基本的には、装剣具に使われる兵庫鎖を応用したもので、非常に手間が懸かるが、仕上がりは滑らかであり、袋物に取り付けた時のフィット感が素晴らしく、銚屋の腕の優秀さがあらわれている鎖である。

最後に紹介する写真の紙入れは、大胆に龍を配した清朝裂を使用。板鎖(写真 -1)は銀製で、芭蕉の葉を象り、葉脈を毛彫りで施す。通常より蝶番を右側にずらして取り付け、紙入れを巻き込む様にして閉めるところがミソである。デザインもさることながら、このような金具はあまり類形が

無く、江戸袋物屋の創造力とコーディネートの良いさが表出されていると言えよう。

以上、私の其角堂コレクションの内から、代表的な板鎖の付いた紙入れを紹介した。まだまだ技術的にも素晴らしい金具類も有るが、紙面の都合上別の機会に譲るとしたい。次回は煙草入れを中心とした袋物の金具類を取り上げたいと思う。

平野 英夫 (Hirano Hideo)

- 1947 東京日本橋生まれ
- 1966 東京都立工芸高等学校金属工芸科卒業
- 1972 ジュエリーデザイン・クラフトマンとして独立
- 1985 江戸東京黒門塾の師範を務める
- 2005 ドイツ文化会館での日独シーボルトシンポジウムにて公演

仕事の傍ら江戸コレクションの充実に努め、リッカー美術館、菱川宣信記念館、サントリー美術館のほか、日本橋高島屋などでコレクション展を開催。



写真



写真 -1



写真



写真 -1



写真 -2(裏面)



写真



写真 -1



写真



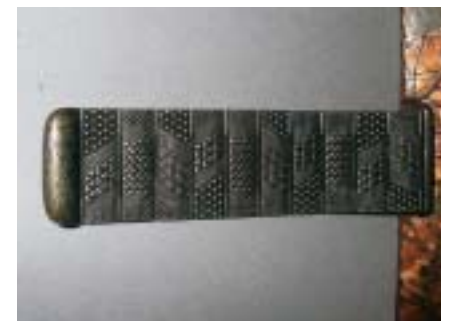
写真 -1



写真



写真 -1



写真



写真



写真



写真 -1